

# 第一章 光る源氏の物語 新春の六条院の女性たち

[第一段 春の御殿の紫の上の周辺]

\*年立ちかへる朝の空のけしき、名残なく曇らぬうららかなげさには(新春元旦の天気雲ひとつない穏やかさには)、数ならぬ垣根のうち\*だに(取るに足らない者の家でさえも)、雪間の草若やかに色づきはじめ(雪を掻き分けて育った若草の緑が見えて)、\*いつしかとけしきだつ霞に(何時の間にか溶け出した雪が霞立つ景色の中に)、木の芽もうちけぶり(木の芽も揺らぎ見えて)、おのづから人の心ものびらかにぞ見ゆる\*かし(自然と人の心も浮き立ってくるように思えるほどですから、)。まして、いとど玉を敷ける御前の、庭よりはじめ見所多く(まして一際丹念に玉を敷いたように美しく飾った六条院は庭を初めとして見事な所が多く)、磨きましたまへる御方々のありさま(磨き上げられた各町の御殿の姿は)、まねびたてむも言の葉\*足るまじくなむ(言い表わそうにも言葉が足りなくなるほどです)。 \*「年立ち返るあした」は注に<源氏三十六歳の元旦。「あら玉の年立ちかへる朝より待たるものは鶯の声」(拾遺集春、五、素性法師)による。>とある。引歌は「初音」巻の導入には如何にも似つかわしい。ただ、「年返る」や「年立ち返る」は<新年になる>という意味の言い方として、既に何度も出てきているし、当時の普通の言い方なのだろう。此处でいう「とし」は殆ど「春」を意味し、「返る」でまた春を迎える>という語感かと思う。今は「年」は「改まる」もので、「年返る」はは少なくとも通常の言い方ではない。しかし「あらたまる」も「あらた」なのではなく、「あらた」「めかす(めいたものとして考える)」ので、全く別の新しいものという認識ではなく、同じように認識できることだから更に課題を設けて<今一度別の筋として取り掛かる>、という言い方だ。実際に「年改まる」もこの物語で使われているし、どちらも<もう一度初めから>ということでは似ているが、「返る」は既経験の共通認識の方に力点があり、「改まる」は未経験の新規課題の方に力点がある。 \*「だに」は比較考察に於いて、比較劣位のものを<～でさえ>と有利条件に適合または不利条件に不適合していることを示して、比較上位の当然の適合・不適合を説明する副助詞、とされる。 \*「何時しかと景色立つ」と「何時しか溶けし気立つ」の言葉遊び、かと思う。「けしき」はもともと「怪し気」だろうし。 \*「かし」の「か」はこの比較考察文に於いては並列助詞で、被比較対照体の「だに」と劣視された一方の<状態・程度>を示す、かと思う。「し」は句切りを示す論理動詞「す」の連用形で、多くの場合に余韻を残す中止法で文末に用いられるようだが、此处では比較対象の一方について述べながら、もう一方の説明に正に連用する部分に当たる構文なので中止法ではない。抛って此处は文末ではないので、句点ではなく読点で下文に繋ぐ。とは言ってみたものの、「連用形」とかいう文法用語は良く分からずに使っていて、実はこの説明は雰囲気物だ。もう少し巧い構文説法は有るかも知れない。 \*「足るまじくなむ」は注に<係助詞「なむ」。下に「ある」などの語句が省略。>とある。

春の御殿の御前(はるのおとどのおまへ、春の町の前庭は)、とりわきて(特に素晴らしく)、梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひ(梅の木の香りが御簾内に焚いた香料に吹き紛れて)、\*生ける仏の御国とおぼゆ(本物の仏の世界かと思われます)。\*さすがにうちとけて(夫人と姫君も本当の親子のように親しげに)、やすらかに住みなしたまへり(和やかに過ごしていらっしやいました)。 \*「生ける」は改めて考えてみると、意外に分かり難い。これは「生く」が四段活用動詞である事による気がする。「生ける」は「生く」の已然形に状態表示の助動詞「り」の連体形がついたもの、とされるから、どうやら四段活用の已然形は仮定条件では無しに正に既然状態を示すもので、だからこそ「る」が付いて<生きている>という意味になる、というワケらしい。より類型理解を得るべく、今でも良く使われる「生きとし生けるもの」という仏教用語

めいた定型句が気になるので、少し考える。まず「生きとし」だが、この「生き」は連用中止法による名詞化なので<生き物>、「と」は述語対象を共通認識として想念規定するための格助詞、「し」は想念規定をする論理動詞「す」の連用形で論理条件を確定して述語用言を待つ、かと思う。これらをまとめて現代語の文法上で被作用述語を補語して言い換えれば、「生きとし」は<生き物として=この世に生を受けた者として=生きるべくあるものと認識される者として=生きるべき者として>という論理認識かと思う。つまり「生きとし」は考え方なので、その論旨に同意できるかどうかという難しい問題はあっても、文法上は「生き」が古語の「生く」でも現代語の「生きる」でも同じ連用形なので違和感はない。ところが「生けるもの」の方は、「生け」が古語「生く」の已然形なのに対して、現代語「生きる」の仮定形では「生きれ」となって「るもの」に繋がらないので、現代語では此方も「生き」という連用形を使って「るもの」に繋げるといふ違和感があつて、文法上も語感上も分かり難い、と言った所だろうか。こう見てみると、「生きとし生けるもの」が「生きるべき者として生きている者」という言い回しでは、同じくこの世に生を受けて生きている者の全て>という意味ではあつても、言語上の力を失うことを実感する。それが言葉の変遷だと言つてしまえば、その通りなのだろうが、古文の効力は未だ意外に力強い。否むしろ、未然形と已然形の説明は四段活用にこそ当てはまるもので、他の活用を別の説明で整理直せば、古語を現代語に甦らせる事も出来るかも知れない。ところで「ほとけ」だが、仏教開祖とされる釈迦のゴータマ皇子は前500年頃の人らしく、没後は理念通りに聖人化され、また理念通りの理想像を本尊たる「仏」として認識する、というのは宗教一般に見られる形態かと思う。だから「生ける仏」は<現出させた理想郷>を意味するだろうし、「この世の極楽浄土」という訳文も分かり易いのかも知れない。しかし必要以上に、というか不適切なほどに逐語訳に留意する掲載訳文が、此処に来て行き成りの意識とは如何なものか。という私のヒネクレ根性から、此処はなるべく原文の言い方を保持する。\*「さすがに」は現代用語でもそうだが、単に<同様に>ではなく<そうは言つてもやはり←何か問題があつたとしても其の欠点を補つて同様ないし同等に>という言い方なのだろう。また「生ける仏のみくに」然ながらに、という複意もあるかと思う。

さぶらふ人びとも、若やかにすぐれたるは、姫君の御方にと選りたまひて(側仕えの女房たちも若くてきれいな者は姫君付きにと選び分けなさつて)、すこし大人びたる限り(夫人近くには少し年輩の者だけが控えて)、\*なかなかよしよししく(皆程々に正月飾りの作法に馴れた落ち着いた風情で)、装束ありさまよりはじめて、めやすくもてつけて(服装や仕草を初めとして万事に卒が無く)、ここかしこに群れあつ(役目ごとに数人づつ寄つて)、\*歯固めの祝ひして(長寿を願ひ固い物を食べて歯の丈夫さを祝う歯固めの御膳に大根や芋や雉肉や押し鮎を揃えて)、餅鏡をさへ取り混ぜて(鏡餅も飾り付けて)、\*千年の蔭にしるき年のうちの祝ひ事どもして(鶴は千年の長寿にあやかつた新年の祝い言葉などを唱和して)、\*そぼれあへるに(賑やかに寿いでいる所に)、\*大臣の君さしのぞきたまへれば(殿がお顔を覗かせなかつたので)、\*懐手ひきなほしつ(袖の乱れを直しながら)、「いとはしたなきわざかな(これは端ない所を)」と、わびあへり(極まり悪がりました)。\*「なかなか」は<中途半端>ともあるが、元々は<中程>の意味だろうから<程よく目立たず>とも言えそうだ。「由々し」は<由緒を心得た風情>かと思う。\*「はがためのいはひ」は<《「齒」は年齢の意》長寿を願つて、正月あるいは6月1日に鏡餅(かがみもち)・大根・押し鮎(あゆ)・勝栗(かちぐり)など固いものを食べる行事。また、その食べ物。《季 新年》>と大辞泉にある。\*「ちとせのかげ」は注の参照歌に<「万代を松にぞ君を祝ひつる千歳の蔭に住まむと思へば」(古今集賀、三五六、素性法師)。>とある。いわゆる「鶴は千年、亀は万年」の囃子言葉みたいなものだろう。\*「そぼれあふ」は<戯け合う>とあるが、私的な遊びではなく、御殿を挙げでの半ば公的な祝賀で、だからこそその華やぎなのだろう。\*「おとどのきみ」は注に<源氏をさす。源氏三十六歳。太政大臣。>とある。\*「ふところ」は<手を懐に入れた格好>とあるが、作業姿なのだろうから袖の袂を袴の腰紐に押し込むような、其処まで大胆で無くとも袖捲くりのような端ない姿だつたのではないだろうか。

「いとしたたかなるみづからの祝ひ事どもかな(ずいぶん盛大な皆々自身の祝い事のような)。皆おのおの思ふことの道々あらむかし(皆それぞれに思う願い事があるのだろう)。すこし聞かせよや(少し聞かせてみなさいよ)。われことぶきせむ(私も祝ってあげよう)」

とうち笑ひたまへる御ありさまを(と軽口を仰る殿の御姿を)、年のはじめの栄えに見たてまつる(女房たちは新年早々の御目出度い標しとして光栄に拝見申します)。われはと思ひあがれる\*中將の君ぞ(中でも筆頭女房を自負する中將の君が)、 \*「中將の君」は<「葵」巻に初出。以下、「須磨」、「濤標」、「薄雲」に登場する女房。「須磨」巻以降は紫の上づきの女房となっている源氏の召人。>と注にある。

『\*かねてぞ見ゆる』などこそ(古歌にも『鏡に主の長寿の相が予見できる』とあるように)、鏡の影にも語らひ\*はんべりつれ(この鏡餅にも同じ相があるように願って語りかけておりました)。私の祈りは(自分の祈りは)、何ばかりのことをか(何ほども願い申しておりません)」など聞こゆ(などと申し上げます)。 \*注に<「近江のや鏡の山を立てたればかねてぞ見ゆる君が千歳は」(古今集、神遊びの歌、一〇八六、大伴黒主)を引く。>とある。必脚である。早速に「古今和歌集の部屋」Web サイトに頼ると、<この歌は左注に「これは今上の御べの近江のうた」とあり、「今上の御べ」とは「今上天皇の大嘗会」ということである。古今和歌集成立当時の「今上天皇」は醍醐天皇であり、その大嘗会は 897 年で当時天皇は十三歳。>とあり、この歌は詠まれた年と場面まで分かるということらしい。近江の鏡山に掛けた言い回しで、「鏡を立てて」予てぞ見ゆとは<人相見の観相学で君主の長寿を読み取りました>と洒落てヨイショしたワケだ。そして、中將君はその「鏡山」に「鏡餅」を掛けて更に洒落て見せた、ということらしい。気の利いた言い回しはいくら使い回しても良い訳だが、問題は誰がどういう場面で使うかだ。いや、此処の中將の君が僭越と言う事ではなく、一般論として。 \*「はんべり」は「はべり」の音便。何だか花魁風。いや逆に花魁が女房風か。

朝のほどは(あしたのほどは、午前中は)人びと参り混みて(女房たちが正月飾りに勤め参じて出入りが慌しく)、もの騒がしかりけるを(もの騒がしかったので)、夕つ方、御方々の参座したまはむとて(夕方になって殿が各町の御方々に御挨拶に伺いなさろうということ)、心ことにひきつくるひ(念入りに晴れ着を着飾って)、化粧じたまふ御影こそ(髪かたちを整えなされる御姿こそ)、げに見るかひあめれ(実に見れば寿命も延びようかという美しさでした)。

「今朝、この人びとの戯れ交はしつる(今朝は此処の女房たちが互いにくだけて新年の挨拶を交わしていたのが)、いとうらやましく見えつるを(とても喜ばしく見えたので、その真似をして)、上にはわれ見せたてまつらむ(妻には私から同じように祝言を申し上げることにしよう)」

とて(と言って殿は)、乱れたる事どもすこしうち混ぜつつ(色っぽい調子を少し混ぜながら)、祝ひきこえたまふ(祝い歌を御贈りなさいます)。

「薄氷解けぬる池の鏡には、世に曇りなき影ぞ並べる」(和歌 23-01)

「肌で解かした薄氷、池の鏡に並ぶ影」(意識 23-01)

\*氷には透明なものと白いものがある。透明な氷は水以上に鏡のような氷面となるが、六条院の池の氷は白かった。だから曇った氷面だった。それが今日の新春元旦の快晴に温んで氷面が解けて池の水面に鏡のように人影が映る。また、鏡のようにとは、鏡餅にあやかって御目出度い。と言った所が歌筋か。歌意としては、「薄氷解けぬる」は<僅かの誤解も無く>でもあろうが、「乱れたる事どもすこしうち混ぜつつ」と敢えて語られていたから<添い寝の人肌で信頼を確かめる>とも見えてくる。「世に曇りなき」はこの日の晴天に掛けながら<晴れてこの六条院の主として世に紛れも無い>という公正さ、というか権勢の誇示によって今の優雅さを愛でると同時に、「影ぞ並べる」で互いにその地位にある自負を喜びたいと寿ぐ。この夫婦ならではの素直さは微笑ましいのかもしれないが、「世に曇りなき」は彼らが本当に権力者であるだけに、私のようなものには嫌味に聞こえる。

げに、めでたき御あはひどもなり(実に麗しい御伴侶同士で御返歌はこうありました)。

「曇りなき池の鏡によろづ代を、すむべき影ぞしるく見えける」(和歌 23-02)

「氷らない池の鏡なら、割れる恐れ也没有」(意識 23-02)

\*注に<紫の上の返歌。「池」「鏡」「世」「影」の語句を受けて「曇りなき池の鏡」「万代」「住むべき影」と返す。「すむ」は「澄む」と「住む」の掛詞。「曇り」「澄む」「影」は「鏡」の縁語。>とある。返歌としての歌筋は、<殿が仰せのように「曇りなき池の鏡に澄むべき影ぞしるく見えける」ので、さぞ「鏡によろづ代を住むべき影ぞしるく見えける」ことでしょう>という、何とも平易な抱き合わせ。いや、平易に複意出来る「すむべきかげ」という言葉の凄さではある。その上、「よろづよをすむ」の祝い言葉は女房たちと同じに「万代を松にぞ君を祝ひ都留千歳の蔭に住まむと思へば」(古今集賀、三五六、素性法師)を踏まえているし、「鏡に影ぞ著く見え」は中将の君と同じに「近江のや鏡の山を立てたればかねてぞ見ゆる君が千歳は」(古今集、神遊びの歌、一〇八六、大伴黒主)を踏まえていて、そのようにこの場面を総括することが、言わば歌意なのだろう。そしてそれは、紫君が全てを心得ているという描写ないし説明という作者の提示である。ただそれだけに、この歌は作者としての完成度の高さが目立って、紫君らしきの演出には必ずしも成功していない気がする。私の感想では、紫君なら「世に曇りなき」を準える「曇りなき」は避ける方が望ましい。尤も、この場面の要諦は祝言としての体裁なのだろうが。

何事につけても(その一つ一つの言葉に)、末遠き御契りを(幾久しく御縁を)、あらまほしく聞こえ交はしたまふ(良いもので在って欲しいと願い交わしなさいます)。今日は\*子の日なりけり(今年は丁度この元日が子の日に当たっていました)。げに、千年の春をかけて祝はむに、ことわりなる日なり(まことに千歳の春を願って祝うには相応しい日なのでした)。 \*「子の日」は注に<元日と子の日が重なった設定。>とある。正に「初子」の祝い日に当たる、ということらしい。ところで、古来から改暦は古今東西で多く行なわれてきたが、この六十順位の干支の日付は古くからのまま変わらずに続いているようで、年代の特定にも応用されることがあるらしい。ただ、「子の日」と言っても五種類のどれかも分からなければ厳密に特定も出来ないだろうし、この物語は史実や記録書でもないのだから、そも特定する意味は無いが、何処か今に繋がる感覚になる考え方だ。

[第二段 明石姫君、実母と和歌を贈答]

\*姫君の御方に渡りたまへれば(殿が姫君のいらっしゃる西面の間にお移り為さると)、童女、下仕へなど(童女や下女たちが)、御前の山の小松引き遊ぶ(築山の松葉を抜いて前庭に飾り立てて遊んでいました)。\*注に<主語は源氏。明石姫君は春の御殿の寝殿を紫の上と分けて西面を使用している。>とある。東西の序列式によるのか、どこかに明示記事があるのか不明だが、動線として自然なので従う。

若き人びとの(座敷では若女房たちが新春の晴れ姿でお出ましなされた殿に)心地ども、\*おきどころなく見ゆ(心落ち着かず浮き立っているようです)。\*「おきどころ」は<身の振り方、処置すべき方法>とある。「おきどころなし」は<身の振りようがない>で、そういう「心地」とは<立場がなくて困る>とも解せるし、より即物的に<我を忘れて当惑する>とも解せる。いずれにしても、新年飾りや初子の祝いに浮かれ気分である事とは違うようだし、作法が分からなければ先輩に聞けばいいので<困惑、当惑>はしない。となるとやはり此处は、殿の艶やかな御出座しに当惑した、と読むのが妥当だろう。かと言って<当惑>は個人的な内心表現に過ぎるので、「心地ども」の表現としては<場が落ち着かない>くらいだろうか。

北の御殿より(きたのおとどより、北の町の明石御方から)、\*わざとがましくし集めたる\*鬚籠ども、破籠などたてまつれたまへり(特に選りすぐって集めた果物かごや菓子折りが姫君に贈り届けられていました)。\*えならぬ五葉の枝に移る鶯も(添え物に飾られた素晴らしい出来栄えの五葉の松の枝に鶯が移り止まった姿の作り物も)、思ふ心あらむかし(さも思う心があるように、)。\*「わざとがまし」の「わざ」は「態(あざとさ)」ではなく「業(技巧)」、「と」は対象表示の格助詞、「がまし」は助動詞「がる、がむ(いっそうその方向に向かって行く)」の未然形に過去の助動詞「き」の連体形が付いて形容詞化したもので、通せば<特に趣向を凝らして>。\*「ひげこ」は編みかごの上端を編まずに伸ばして綴じ代にしてある図が古語辞典に掲載されていた。今なら贈答用の果物の詰め合わせになりそうな入れ物。「わりご」は前にも出て来たが、折り箱で弁当箱や菓子折り箱。\*「えならぬ」は「えも言われぬような(言いようも無く素晴らしい)」の略語という一意ではあるのだろう。が、「えならず」という語は<ただならず>という意味と古語辞典に説明されていて、ウグイスが定番の梅から松(待つ)の枝に「移る」姿を<特に意図して>作っている、という描写でもありそうだ。なお、注には<五葉の松も鶯も細工物。>とある。

「年月を松にひかれて経る人に、今日鶯の初音聞かせよ (和歌 23-03)

「明けた初子に鶯の、初音聞こうと御用待つ (意識 23-03)

\*注に<明石御方から娘への贈歌。「松」と「待つ」「古」と「経る」「初音」と「初子」の掛詞。「松」「引かれ」は縁語。「松の上になく鶯の声をこそ初ねの日とはいふべかりけれ」(拾遺集春、二二、宮内卿)。『完訳』は「新春でも娘に再会できぬ実母の嘆きの歌」と注す。>とある。明石御方は姫君に「松にウグイス」の拵え物を贈った。それは勿論、新年祝いの引き出物であり、その枝にこの和歌を結うか挟むかしてあったのだから参照歌に掛けた歌詠み心の風情としての飾り物、には違い無い。しかし「小松引き」は若葉を親木から引き抜くのであり、引いて遊ぶ子供は松の生命力を授かるのかもしれないが、「引かれ」た松は葉を生やした甲斐が無い。実際に明石君は「薄曇」巻の第一章第四段の「母子の雪の別れ」の場面で、「末遠き二葉の松に引き別れいつか木高きかげを見るべき」(和歌 19-03)と詠んでいて、作者の整合性に驚かされる。いやしかし、歌は「まつを」ではなく「まつに」としてあるので、表面上は「松」は御方自身では無く姫君を指すものと装っては居る。つまり、「松(=姫)に引かれて(惹かれて、牽かれて)」私という「人」は「としつきをふる」という筋だ。が、この「初子」の日に「松に引かれて」の詠み言葉を「小松引き」と意

識しない者は居ない。明石御方は精一杯御目出度い歌を作ったが、それでも悲運の嘆きは隠せない、という作者の演出か。私はこの、実の親子が入内の為の名目上の親子を憚って、同じ敷地内に住まいながら、一切会えないという身分社会構造の現実を改めて思い知って、暫くノートする手も止まったほどだ。この場面と言うより六条院の全てが明るい色で書かれた沈んだ絵に思える。光君は位人臣を極めて、俸禄自体も莫大だっただろうが、むしろ国家組織や国家予算を限度や節度はあるにしてもその裁量を一任されて、思うように使えたのである。確かに藤原大臣の実力は軽視できないし、本より王家から下った身であってみれば、絶対専制君主ではないが、この時代の実情からすれば、実務の責任は内大臣に任せて、国力の源泉たる祭祀の責務は帝が奉るので、光君の立場は責任責務も無く尊敬と権限を得るといふ浮き上がった存在である。が、それが理想的でないことは、この場面のように女の悲劇として現れる。となると、ふと思い出すのは、玉鬘の故母君であった夕顔の行動だ。夕顔はこの悲劇を恐れて、時の右大臣家と頭中将から逃げたのか、と思いつく。しかし、明石御方は逃げられない。父の明石入道の強い思い入れに應えるべく存在しているからだ。そして、その生き方を天命と受け止めているからだ。形式的には、光君は紫君を退けて明石君を正妻に据える方法は在るのだろうが、それは外形でも内実でも光君の望む生き方では無い。光君の矛を以ってしても、紫君が子を設けなかったという不幸は、この六条院の住人全ての不幸だと思わずには居られない。こうした構成の愛憎劇は今でも、というか古今東西何処にでもある話だろうが、この六条院の煌びやかさは、この女たちの悲劇、とは男の悲喜劇でもあるが、を際立たせるために作者が設けた舞台装置なのだと思得する。などと斯くも長々と、すっかり感慨に浸ってしまったが、歌に戻る。上句の「としつきをまつにひかれてふるひとに」には、前述した万感の思いを包み隠して、正月らしい賑わいで軽やかに流そうとする工夫が、申し訳程度ながら施されている、という演出で明石御方に作者は書かせている。「松に惹かれて」若葉の成長を楽しみに「年月を待つ」まま「に引かれ」続け「て経る古人に」という筋に、「松に引かれて経る」を<元日に小松引きの初子の日を迎えて新年が目出度く明けた>と読ませている。そう読ませた上での下句の「けふ」だから<この元日に>となる。元日に贈った歌だから「けふ」は元日には違いないが、祝い言葉がなければ引き出物には成らない。そして、下句余語の「うぐいすのはつねきかせよ」は「初子」と「初音」の洒落言葉の言い回しがあるだけで、<あなたの新年のお返事を聞かせて下さいね>以外の意は見当たらない。

『\*音せぬ里の(日頃は物音も無い里で寂しく暮らす老人に)』 \*この中止法の添え句は丸で囃子言葉のような調子で、もう一度「年月を松にひかれて経る人に」という上句が聞こえてきそうな弾みを感じる言い方だが、弾みというよりは上げ潮の引き潮のように返歌を催促している親心かも知れない。注には<歌に添えた言葉。「今日だにも初音聞かせよ鶯の音せぬ里はあるかひもなし」(源氏積所引、出典未詳)を引く。>とある。

と聞こえたまへるを(との歌文が贈り申し付けなされていたのを)、「げに(如何にも)、あはれ(実母であれば無理もない)」と思し知る(と殿はお考えになります)。\*言忌もえしあへたまはぬけしきなり(元日に縁起でもない不調法さえ堪え切れず涙を流すご様子です)。\*「こといみ」は<不吉な言動>。元日に涙は禁物、ということらしい。

「この御返りは、みづから聞こえたまへ(この御返歌は御自分でお書きなさい)。初音惜しみたまふべき方にもあらずかし(初音を惜しみなさる相手では無いのですから)」

とて、御硯(おんすずり、硯と筆を)取りまかなひ(取り揃えさせなさって)、書かせたてまつりたまふ(殿は姫に書かせ申しなさいます)。いとうつくしげにて(とても可愛らしく)、明け暮れ見たてまつる人だに(毎日世話を申し上げる女房でさえ)、飽かず思ひきこゆる御ありさまを(見飽

きることはないと思ひ申し上げる姫君の御姿を)、今までおぼつかなき年月の隔たりにけるも(今までもどかしいまま長年に渡って会わせずに来てしまったことを)、「罪得がましよう、心苦し(罪深く申し訳ない)」と思す(と殿はお思いになります)。

「ひき別れ年は経れども鶯の巢立ちし松の根を忘れめや」(和歌 23-04)

「長く別れて暮らしても、明石の松は忘れません」(意識 23-04)

\*姫君の初出歌である。先の注に、姫はこの年で八歳とあった。私見では九歳かもしれないと思うが、別に八歳でも良い。一見して、ほぼ贈歌のオウム返し印象。「ひきわかれ」は「ひかれて」に対して、「としはふれども」は「年月を経る」に、「うぐいすのすだちしまつのは」は「鶯の松に引かれて」に、「ねをわすれめや」は「初音聞かせよ」に、逐一反語立てている。律儀といえば素直だし、くどいと言えば稚拙だ、と如何にも思わせる詠み方のようだが、「音」を「根」に変えただけで後はそのまま返せば反語になるという、物凄い技巧である。然も自らをウグイスに例えて「初音」を応えているし、子の日の「松」で新年の祝言にもなっている。その上、「音を忘れめ」で「音せぬ里」に思い遣りを持って応えてもいる周到さ。斯くも読者が唸るのを承知の上で、それでも幼稚さを演出出来ているという作者の頬苦笑みが見える歌だ。また、「引き別れ」は「薄雲」巻の「母子の雪の別れ」で明石君が詠んだ歌にも応えているワケだが、若君は当時三歳であり、歌意を理解できる筈は無かった。尤も彼歌は光君に宛てられたもので在り、書き留められていたものを後になって若君が知ったという事情は在り得たかも知れない。だとしても、「待つ(の、という人の心)根」という言い方で、母君が贈歌で自らを「年月を待つ古人」と言ったことに掛けて<親の恩>を言い表すという才の立った詠み方は、およそ幼児の発想では無い。などと私がいくら反論しようと、作者はお構い無しに次のように念を押すのである。

幼き御心にまかせて(姫の御返歌はこのように、幼心のままに)、\*くくだしくぞあめる(ひと言づつに應える煩わしさなのでした)。\*「くくだし」は<くどくて煩わしい>。注には<語り手の批評。『集成』は「草子地による歌の批評。理屈が勝って余情に乏しいといったところである」。『完訳』は「語り手の評言。物語ではじめて歌を詠む姫君の成長ぶりに注意」と注す。>とある。が、「理屈が勝って余情に乏しい」とは、私には思えない。「語り手の評言」の態を取った作者の押し付けである。「幼き御心に任せて」とあるが、本当にその通りなら、<幼いからこそ>親はどんな言葉にも情感を受け止めるので「くくだし」などとは思わない。

### [第三段 夏の御殿の花散里を訪問]

夏の御住まひを見たまへば(次に殿は夏の町のお住まいに行つてごらんになると)、時ならぬけにや(今は春で季節が違ふ所為か)、いと静かに見えて(庭先はごく地味で)、わざと好ましきこともなくて(特に風情がある景色も無く)、あてやかに住みたるけはひ見えわたる(花散里の御方が上品に暮らしている様子が感じられます)。

年月に添へて(御二人は付き合いが長くなるほど)、御心の隔てもなく(互いの気構えも無くなり)、あはれなる御仲なり(すっかり馴染んだ御仲でした)。今は、\*あながちに近やかなる御ありさまも(今は強いて肌を合わせる御関係も)、もてなしきこえたまはざりけり(殿は持ち掛け申そ

うとは為さいません)。いと睦ましく\*ありがたからむ\*妹背の契りばかり(とても親しく信頼して今年も変わぬ息子の母親役のお願いばかりを)、聞こえ交はしたまふ(お話し合い為さいます)。御几帳隔てたれど(御几帳越しの面談ですが)、すこし押しやりたまへば(御顔や御姿を見ようと殿が少しずらしなさっても)、またさておはす(御方は特に取り繕いもせずそのまま座っていらいっしやいます)。\*「あながちに近やかなる御ありさま」はずいぶん曖昧な言い方だ。逐語だとく強引に近付こうとする御態度>だろうか。心理表現だとすれば、実は良く分かる言い方ではあるが、やはり外形的な分かり易さを狙ってく強いて肌を合わせるほどの側居>と、少々妙な口調に言い換えた。\*「ありがたし」はく滅多に無い、得難い、めずらしい>ともあるがく尊い>ともある。この文は殿の目線での語りと考えて、以前からの評価である花散里に対する殿のく信頼>と取る。\*「いもせのちぎり」はく夫婦間の約束>とのことだが、それでは意味不明なので、文脈と今までの花散里に関する記事から文意を類推して、尤もらしく言い換えた。

「\*縹は(はなだは、私が花散里の晴れ着に選んだ水色地の上着は)、げに、\*にほひ多からぬ\*あはひにて(実に華やかさの無いこの人の風貌に釣り合っていて)、御髪などもいたく盛り過ぎにけり(髪の色もだいぶ瘦せていて、)。\*やさしき方にあらぬと(見苦しくないようにと)、\*葡萄鬘してぞつくるひたまふべき(付け髪を添えて身繕いなさっているようだ)。\*「玉鬘」巻第五章第一段の「歳末の衣配り」に於いて、「浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、匂ひやかならぬに、いと濃き搔練具して、夏の御方に。」と記されていた。\*「にほひ」はく華やぎ>。\*「あはひ」はく取り合わせ、釣り合い>。\*「やさし」はく「瘦す」の形容詞化。肩身が狭く身も痩せるような思いであるというのが原義。>と古語辞典に説明されていて、くつらい、恥づかしい、みっともない>ともく優美だ、上品だ、けなげだ>ともある。\*「えびかづら」は古来から日本に自生する野生ブドウで「エビヅル」のこと、と一説にはあるが、古くは「ヤマブドウ」などを含む自生ブドウ総体のことだった、ともある。「えび」の発音は古く「葡萄」の字を当てたのは後世、とのこと。また、海のエビとの関係は明示資料がなく不明のようだが、中空の茎を他の木や地面に這わせて成長する種類のツル植物と違って、エビヅルは枝先の葉を変形させた巻きヒゲで他の木に絡み付く種類のツル植物とあり、幾つか植物観察サイトの写真を参照したが、特に「かのんの樹木図鑑」サイトの「エビヅル」ページにあった巻きヒゲの写真は色形が茹でた小エビに似ていた。ただ、紫草で染めた「ブドウ色」を「えび色」と言うのも、この実の色からとのこととされ、この自生ブドウと海エビの命名はどちらが先なのか、関係が有るのか無いのかやはり分からない。いずれにしても、「葛」と「蔓」と「鬘」は同音の文字り言葉で、カヅラ(かもじ、付け髪)のことを洒落て「エビカヅラ」と言った、のだろう。

我ならざらむ人は(私で無ければ)、\*見醒めしぬべき御ありさまを(見限ろうかという御方のこの衰えた御姿を)、かくて見るこそうれしく本意あれ(こうして親しく見るこそ私の本分たる充実感を覚えるものだ)。\*心軽き人の列にて(もしこの人が心移りしやすい人の類で)、われに背きたまひなましかば(私に背を向けなさって他の男の所へ行ってしまうのなら、この王朝の格式は実現できなかつただろう) \*「見醒めしぬべき」の文は「瘦せたなあと思ったら泣けてきた」というボロの原型である。とか言いたい所だが、同じ価値観を共有して青春の荒波を潜って来た戦友であり恋人、というには花散里は幾分と実年齢も心得も古い人である。故桐壺院の女御の妹君であり、その御方を御世話し、また御方からも信頼を寄せて貰ったからこそ、一仕事を成し遂げたという今更ながらの光君の充実感なのだろう。\*「心軽き人の列」の「こころかるきひと」はく浮気っぽい人>の語感だが、「つら」は少し引っ掛かる。「列」自体はく同類>を意味するしく浮気性の同類>と考えても、光君の真意を測りかねて他の男と一緒にになった女も数多く居たらしいような記事も以前にあったので、一意はそう取って良さそうだが、それだけなら「心軽き人の列にて」全部が不要にさえ見える。やはり、敢えて「心軽き人の列にて」と言うのだから、「列」は光君の個人的な分類だけでなく、より

一般的な社会的分類をも示していそう。だから、「こころかるきひとのつら」は<心得の足りない人たち→王朝作法を知らない人たち>を複意している、のだろう。それが「はい」の意味でもある。

など、御対面の折々は、まづ、「わが\*心の長きも(我ながらの執着心も)、人の御心の重きをも(この人の昔気質な流行物に移り気の無さも)、うれしく(変わらぬ懐かしさで)、思ふやうなり(考えていた通りの好ましい現状だ)」 \*「心の長き」は光君の性格を現すと言葉としてよく使われる。「短気」に対してなら「気長」という性格とも取れるし、藤原大臣の短気に対して源氏大臣の気長という表面上の描写はあるかとも思うが、此处で言う「心の長き」は<女を決して見限らないこと>を意味していて、なぜ光君が女を見限らないのかは、未摘花で象徴的に説明されている。光君の考えでは、女こそが文化の、光君が執着するのは特に王朝文化だが、継承者だという認識で、だからこそ王家に縁ある実力者はその者たちを庇護しなければならない、という使命感、のようだ。一般的に考えても、卵子は継承を担うから確実性を求め、精子は開拓を担うから多様性を求める。そうした使命感は<気長>ではなく<執着心>というべきだ。

と思しけり(とお思いになったのです)。こまやかに、ふる年の御物語など、なつかしう聞こえたまひて(こまごまと旧年中の出来事を思い出してお話なさって)、西の対へ渡りたまひぬ(殿は西の対へ移って行かれました)。

#### [第四段 続いて玉鬘を訪問]

まだたくも住み馴れたまはぬ\*ほどよりは(まだあまりこの六条院に住み馴染んでおられない割には)、けはひをかしくしなして(西の対の様子は全体に整っていて)、をかしげなる童女の姿なまめかしく(可愛らしい童女たちの晴れ着も華やかで)、人影あまたして(女房も多く揃えていて)、御しつらひ、あるべき限りなれど(正月飾りは最小限で)、こまやかなる御調度は、いとしも調べたまはぬを(気の利いた道具類はそう多くは用意なさっていないながらも)、さる方にもものきよげに住みなしたまへり(御ゆかりの君はそれなりにこざっぱりとお住まいでした)。 \*「ほどよりは」は<～の割には>なので、やはりこの人は六条院落成の翌年に移り住んだのではないのだろうか。この正月現在から見て、去年の九月に筑紫姫は六条院入りしている。もし六条院落成が同じ年なら、落成および主要人物の引越しは八月とされるので、ほぼ同時期とさえ言えるほどで、この人だけ「まだたくも住み馴れたまはぬ」という言い方に説得力は無い。ただ、他の人たちは源氏大臣の妻としての生活は既に在って、その関係性や生活様式に大きな変化が無いまま、二条院などから移住したのであり、その意味ではこの人だけが母親探して筑紫から帰京して、父親の藤原大臣の庇護を求めていた生き方から、源氏大臣の世話になっているという現在の変節振りに「まだたくも住み馴れたまはぬ」という解釈は、成立するような気もする。それでも、明石御方は十月の引越なのであり、自分の母親の領分にして独立性の高い大堰山荘から、完全に大臣の勢力下にして娘を紫君に預けたことをより身近に感じざるを得ない六条院に移る事は、外形に於いても内心に於いても少なからぬ生活感の相違が在ったに違いない事を思えば、この人だけに「住み馴れたまはぬ」とあるのはやはり気になる。

\*正身も(若い姫本人も)、あなをかしげと、ふと見えて(これは美しいと、一目で思えて)、山吹にもてはやしたまへる御容貌など(山吹襲に一段と引き立っていらっしやるお顔立ちなど)、いとはなやかに、ここぞ曇れると見ゆるところなく(とても華やかで、此处は少しと思われる難点

も無く)、隈なく匂ひきらきらしく(四方に輝きを振りまいて)、見まほしきさまぞしたまへる(殿が衣配りで思い描いたとおりのお姿でいらっしやいました)。 \*「しゃうじみ、さうじみ」は末摘の若い時と明石君の若い時に次いで、久々に使われた代名詞だ。官職名が無く、適当な愛称も定まっていなくて特定する呼称のようだが、「御本人」と言い換えても原文の意図に合うような気がしない、とは以前にもノートした。古語辞典の「しゃうじん」にはくなまみ、ほんもの>ともあり、単に人の特定以上に、「生身」や「生々しい存在」を漂わせる語用に思えるし、若い女に使えばやはり「生娘」を強く感じさせる。ただ、「生娘」説は情交後の明石君に用いられたことで瓦解した。せめて此处ではく若い御本人>とする。なお、「玉鬢」巻の「歳末の衣配り」では、この姫の晴れ着に付いて「曇りなく赤きに(鮮やかな明るい黄色の内着に)、山吹の花の細長は(山吹色の派手な肩掛け晴れ着という取り合わせは)、かの西の対にたてまつれたまふ」と語られていた。

もの思ひに沈みたまへるほどのしわざにや(母親探しの祈願で寺社参りに歩き回りなさっていらした所為なのか)、髪の裾すこし細りて、さはらかにかかれるしも(髪の手先が少し磨り減って、さらさらと着物の裾に掛かっているのも)、いとものきよげに、ここかしこ(とても清楚な全体像になって)いとけざやかなるさましたまへるを(とても際立って美しくいらっしやるのを)、「かくて見ざらましかば(この姫をこうしてこの六条院に迎えられなかったなら、どんなに残念だっただろう)」と思すにつけても(とお思いになるところからして)、えしも見過ぐしたまふまじ(とても殿はこのまま娘としてのお世話でお見過ごしにはなさらなそうです)。

かくいと隔てなく見たてまつりなれたまへど(殿は姫を六条院で、このようにごく近くで隔てなくお世話申すようになっていらしたが)、なほ思ふに(それでも見たところ)、隔たり多くあやしきが(姫は内心で打ち解けない、隔たりが多くありそうで)、うつつの心地もしたまはねば(まだこれが現実と思えない様子でいらっしやって)、\*まほならずもてなしたまへるも(信じきっていない素振りを為さるのが)、\*いとをかし(娘とは違う恋人の余所余所しさを思わせて、そそられるのでした)。 \*「まほ」は「真顔」。「まほならず」はくまともに受け付けない>。 \*「いとをかし」はくとても興味深い→好奇心を刺激される>。

「年ごろになりぬる心地して(昔から知っている心算で)、見たてまつるにも心やすく(お会い申し上げるのにも気兼ねなく)、本意かなひぬるを(私としては貴方をこの邸に迎えられて、本望が適った思いで感謝していますので)、つつみなくもてなしたまひて(貴方は何憚ること無く此处でお暮らしなさって)、あなたなどにも渡りたまへかし(あちらの私の住まいの方にも遊びにお越し下さい)。いはけなき初琴(ういごと、初めて琴を)習ふ人もあめるを、もろともに\*聞きならしたまへ(一緒に聞いて親しんで下さい)。\*うしろめたく(あなたが心配するような)、あはつけき心持たる人なき所なり(人を見下す気性の者は居ない所です)」 \*「聞き馴らし給へ」は「聞き馴らす+給ふ」ではなく、「聞き馴らす+為給ふ」と取る。「聞き馴らす+給ふ」はく聞き馴れて下さい→いつも聞いて馴れっこにして下さい>。「聞き馴らす+為給ふ」はく聞いて馴れる様にして下さい→たまには聞いて親しくして下さい>。後者の方が押し付けがましく無い。 \*「後ろめたく淡付けき心」は「後ろめたく(て)淡付けき心」ではなく、「後ろめたく(思ひ給ふべき)淡付けき心」と取る。「あはし」は「あはむ」「あはう」「阿呆」の類語と見当し、「あはつけし」はく「あはし(淡し=考えが浅い、思慮が足りない)」がましい傾向がある>と解する。「後ろめたく(て)淡付けき心」はく根に何か持つ疎ましい気持ち>。「後ろめたく(思ひ給ふべき)淡付けき心」はく貴方が用心するような田舎者を馬鹿にするような性格>。後者の方が分かり易い。

と聞こえたまへば(と殿が話し聞かせなさいますと)、

「のたまはせむままに\*こそは(仰せの通りに、致したく存じます)」 \*「こそ」の係助詞での中止法を受けるなら、「のたまはせむままに」の述語「あらむ(在るべく致します)」は已然形の「あらめ(当然そう在るべく致します)」くらいの重さで良さそうだが、「は」と強調されると「あらむぞかし(必ずやそう在るべく致します)」まで含意する。ただし、中止法なので明言ではなく、あくまで存念として。

と聞こえたまふ(と姫はお応え為さいます)。\*さもあることぞかし(如何にもそうあつて然るべきお応えに違いありません)。 \*だから此の言い回しは、姫が「こそは」の中止法で省略した部文をなぞること、姫が明言を避けた事までを含めて「さもあることぞかし」と表意した、語り手の洒落ぞかし。

### [第五段 冬の御殿の明石御方に泊まる]

暮れ方になるほどに、明石の御方に渡りたまふ。近き\*渡殿の戸\*押し開くるより(向かい側に近い渡殿に面した妻戸を御殿の部屋女房が押し開くやいなや)、御簾のうちの追風、なまめかしく吹き匂はして、ものよりことに\*気高く思さる(一段と事改まった神聖な正月気分を殿はお感じになります)。 \*「わたどののと」は渡り廊下に面した御殿の妻戸で、外開きに違い無い。だから、殿が開けるなら引き開く。いや、引き開くのは横開きの引き戸で、軸回転構造のくりり戸は前後に押すのか、などと言う前に、そも誰が戸を開けたのだろう。殿自身が戸の開け閉めを出来るのは確かだろうが、これはお忍び行脚ではなく年始廻りであり、区画ごとに担当者が変わったとしても、必ず側仕えの女房を従えていたに違いないので、戸の開け閉めはその者たちの業務であり、特に御殿への出迎えは部屋付き女房の仕事始めではないのだろうか。現在の電化生活で便利になった手間は、平安当時はおろか最近まで、いや現在でも電気と電動製品が無ければ、全て人手による仕事であり、だから使う人と使われる人との明確な身分格差が必要だったのだ。そうでなければ、文化生活が実現しないし、社会発展も望めないし、社会秩序も維持できない。電気によるヒトの解放は計り知れない。しかしそれだけに集合比較人類智を求めるなら、現在ではプログラムの規格化と市場商品化の両立および価値の多様性が恒常的に担保されなければならない。と、またノートが長くなったが、言いたいのはつまり、殿にとって妻戸は自動ドア状態だったということだ。 \*「押し開くるより」については、起点の格助詞「より」の語法に<活用語の連体形に付く形で、~するやいなやの意を表す>と古語辞典にあり、「開くる」は正に「開く」の力行下二段活用の連体形だ。 \*「けだかし」は<高貴である、上品である>とあるが、王朝風な飾付けは花散里が正統だろう。此处は新年の事改まった神聖な空気感が香料の新鮮さから感じられたのではないか、と勝手に想像する。

\*正身は見え(御方自身の姿は見え、)。いづらと見まはしたまふに(何処にいるのかと殿が部屋中を見回しなさに)、硯のあたりにぎははしく(硯機の辺りが散らかって)、\*草子どもなど取り散らしたるなど取りつつ見たまふ(歌の下書きなどが書き置かれているのを殿は手にとって御覧なさいます)。 \*「さうじみ」の語用に作為を感じる、とは返す返すノートしてきた。此处では<御方自身>と言い換えたが、本文に「御方」とあっても何ら不思議の無い記事かと思う。まして、此处では西の対の御ゆかりの君とは違って、明石御方であり、若君の実母であり、冬の町の御方であり、明示に困る人物では無い。それが、西の対の君に続いての「正身」表記である。此处で作者から感じられるのは<女の生々しき>を示す語用だが、だと

すると露骨過ぎる気がして今一腑に落ちない。どうも「正身」は気になる。\*「さうし」は「冊子」ともあり<本、かな書き書物の総称>とあるが、また<原稿、下書き>ともある。注には<『集成』は「朝方、明石の姫君に手紙を書いたあと、そのままなのだろう。ここは和歌の草子であろう。『完訳』は「朝方、姫君に消息したまま、来訪の源氏に歌反故を見せようとする下心か」と注す。>とある。が、「和歌の草子」は良いとして、「朝方」からの「下心」とは妙な注だ。下に「小松の御返りを、めづらしと見けるままに、あはれなる古事ども書きまぜて」とあるのだから、夕つ方以降に届けられた若君の返歌に感激して、殿の年始廻りは予期しながらも、あまりの嬉しさにその自分の気持ちを書き留めようとしていた所に、殿の御成りが知らされて慌てて身繕いに隠れた場面、と取るのが自然だろう。いや、敢えて注釈に反論するために下文の先読みをしたが、言いたいのは、何も御方の「下心」などを邪推せず本文を素直に読み進めば良いだけのことなのに、という残念な思いだ。いや、御方に何がしかの意図がありそうだと感じるのは読者各人の勝手だろうが、妙な注釈は一読者の気持ちをざらつかせる。実に不可解だ。私には、作者が膨らませようとしているのは、御方の意図ではなくて、殿の心象に思える。

唐の\*東京錦の(大陸からの輸入品の綺織物で)ことことしき端さしたる茵に(麗々しく縁取りした座布団の側に)、をかしげなる\*琴うち置き(気の利いた七弦琴が添え置かれていて)、わざとめきよしある\*火桶に(上質で上品な火鉢に)、\*侍従をくゆらかして(侍従香を燻らせて)、物ごとにしめたるに(それらの物に香りを染ませようと薫り高くなっている部屋に)、\*衣被香の香のまがへる(衣服用の粉末香の香りが混じって)、いと\*艶なり(とても高揚感があります)。\*「東京錦」は「とうきやうき、とうぎやうき」で<もと中国から渡来し、のち日本で模造した錦(にしき)。赤白の碁盤模様の白地の部分に、鳥・蝶・藤の丸などを赤く織り出したもの。>と大辞泉にあり、そこまでの説明があるのだから画像がありそうだと少し検索したが、参照サイトは見当たらなかった。こういうものは文字の説明では分かり難い。なお、「茵(しとね)」は<座布団>。\*「琴(きん)」は<琴柱ではなく指盤で音階を得る七弦の中国古琴>。\*「火桶(ひをけ)」は<木製の丸形の火鉢。表面は木地のまま、または漆を塗り、蒔絵(まきえ)などを施し、内側に金属板を張ったもの。《季 冬》>と大辞泉にあり、古語辞典には図もあった。\*「侍従(じじゅう)」は「燻らかす」とあるから、大辞泉にある<薫物(たきもの)の名。沈香(じんこう)・丁香(ちやうじこう)・貝香などを練り合わせて作る。>というものの、のことらしい。\*「衣被香」は「えびかう、えひかう、えひのか」で<調合香料。細粉末状の香という。衣服や文書に畳み込み芳香保持と防虫に使った。>と古語辞典にある。\*「艶(えん)」は<つややか、はなやか、なまめかしさ、おもわせぶり>とあり<官能美を表現する>と古語辞典に説明されている。作者の折角の具体的な描写も、その品々の実体を知らない私には、訳文に在る「優美」で全体の感じを<上品なのだろう>と見る他は実際は無いのだが、あえて殿の臨場感に沿って<高揚感>と試してみた。

手習どもの\*乱れうちとけたるも(数枚の試し書きが親しげに書き流してあるのも)、筋変はり(いつもの手筋と違った)、\*ゆゑある書きざまなり(母心が偲ばれる書体でした)。\*ことことしう(事を構えて)\*草がちなどにも\*され書かず(漢字を草書体風などにも崩し書きしたりせず)、\*めやすく\*書きすましたり(平易で丁寧に書き整えられていました)。\*「乱れ打ち解く」は<乱雑に散らかる>ではない。状態の概観は既に「草子どもなど取り散らしたる」以下に描写されている。今はそれらの草子を「取りつつ見たまふ」た上での、その紙に書かれた書面についての話題だ。「乱る」は<乱雑な様子>かもしれないが、<取り乱した気持ち>かもしれないし、<崩した形>かもしれない。が、何れにしても主語は「手習ども」の筆跡された文面であり、辞書には<うちとける、礼儀が崩れる、だらしなくなる、色めく>とも説明されるが、御方の関心が若君だとすれば<打ち解けた親しさ>を示していそう。しかし、そうなると「打ち解く」は如何にも重複表現だし、この時点では若君への関心は明示されていないので、恐らく作者は実際こうした思わせぶりの書き方で、読者

が殿の目線に立つ臨場感を意図してもいるのだろう。だから、その味わいを堪能できない私にとっては分かり難いだけだが、「乱れ打ち解けたる」は文字通り<乱れ打ち解けた筆跡>だったと理解するべきで、先読みで<親しげに書き流してある>などと言い換えるのは邪道かも知れない。しかし、この文の分かり難さは先読みをしない事には、私のように実体を知らない者にとってはとても手に負える代物ではない。\*「ゆゑ」は<理由、いわれ、由緒、趣き、風情>とあるが、時に<身分、然るべき素性>などを意味するともある。明石御方は田舎育ちだが教養人との人物像に描かれている。だから、一読した時は「ゆゑある書きざま」を<風流な筆跡>かと思い、「筋変はり」を<凝った書体>なのかと考えたが、それでは以下の文が読み下せない。で、先読みの後付なのだが「ゆゑある書きざま」を<理由が分かる書き方→(若君への)思いが偲ばれる書体>と考え、「筋変はり」を<殿が見慣れたいつもの手筋と違う←型通りではない>と理解した。\*「ことことし」は<仰々しい、物々しい>とある。正式な文書などの<型通りの大人の目を意識して身構えた字体>かと思う。\*「草(さう)」は<書体の一つ。草書。>また<草仮名の略。>とも<草稿、下書き>とも古語辞典にある。「草書、草書体」は<書体の一。古くは、篆隸(てんれい)を簡略にしたもの。後代には、行書(ぎょうしょ)をさらに崩して点画を略し、曲線を多くしたもの。そう。そうがき。>と大辞泉にある。「草仮名(さうがな)」は<草書に書きくずした万葉仮名。これをさらに簡略にしたものが平仮名。草(そう)。>とある。此処では字体のことだから<草書>のことで、「草がち」は<草書体風>。\*「され書く」の「され」は「さる」の連用形に違いない。「さる」は「戯る」と「曝る」があり、「戯る」は<たわむれる、しゃれる、気取る>とあり、「曝る」は風雨や日光を被曝して形が崩れることから<味がある、風情がある、風流だ、洒落ている>とある。此処は書体の話題だろうから、「さる」を原義の<崩す>と取って、「され書く」は<気取って書く>ではなく<崩して書く>と解する。\*「目安し」は<見た目に感じがよい。見苦しくない。また、無難だ。>と大辞林にある。これが字体のことなら、その字が漢字で崩さない楷書を意味するようにも見えるが、字体の話題は前節で終わっている。また、これを<身分や立場をわきまえた見苦しくない>御方の態度と解するのも、文面の話題からは飛躍しすぎる。そこで、「めやすし」を「目易し」と取れば<読み易い>だろうから、主語は漢字と仮名交じりの読み易い「文体」とも考えられる。御方の念頭には若君への思いがあるとして、此処は<平易に書かれた文書>と読む。\*「書き澄ます」は<整然と清書する。>とある。これも若君への思いから<丁寧に書かれた文書>と読む。此処の文意は私には実に分かり難いが、作者は殿の目線の臨場感で、「草子どもなど取り散らしたるなど取りつつ見たまふ」うちに、御方の若君への母心を次第にひしひしと感じて、それが同時に自責の念に駆られて来ると言う実父の心理描写表現を工夫しているのだろうと憶測する。しかし、それにしてもこの分かり難さは何だ。多分、女房語りの前提になっている当時の見識を、私が全く理解していない所為なのだろう。今更の嘆息だが。

\*小松の御返りを(小松のように引き別れた姫からの御返歌を)、めづらしと見けるままに(御方は稀なことで嬉しいと思うままに)、あはれなる古事ども書きまぜて(身に染む古歌の名文句なども書き混ぜながら)、\*「小松」は姫君を喩える。と注にある。

「めづらしや花のねぐらに木づたひて谷の古巢を訪へる鶯 (和歌 23-05)

「温いねぐらを飛び出して、寒い里まで会いに来る (意識 23-05)

\*注に<明石御方の独詠歌。「花のねぐら」は春の御殿、「谷の古巢」は明石の冬の御殿、「鶯」は姫君を喩える。『完訳』は「養母に愛育されつつも実母を顧みる姫君を、感動的に受けとめた歌」と注す。>とある。独詠歌ではあっても、姫を思つての歌であり、返歌への返歌の趣で姫に伝わることを意識はしているのだろう。その所為か、この歌は注釈が冗長に思えるくらい、まるで現代語のように筋が分かる平易さだ。「ねぐら」も「古巢」も現代語に伝わ

ているし、「こづたふ」は日常語ではないが、「木伝ふ」と漢字表記すれば木の枝から枝へ移る。枝を伝う。>と古語辞典に説明される意味も分かり易い。小鳥や猿の移動姿は自然と絵に浮かぶ。手紙が女房の手を伝って届けられたのを、手紙自身が飛んで来たように思いたい御方の気持ち、なのだろう。また、「訪へる(とへる)」という言い方自体は今はないが、意味が<訪ねて来た>または<訪ねて来ている>だということは漢字表記のおかげもあって容易に察しが付く。少し突っ込めば、「訪へる」の「訪ふ(とふ)」が四段活用の古語なので已然形を取って「り」に繋がり、その完了の助動詞「り」が<鶯>に連体するために「る」となっているのに比べて、「訪ふ」の現代語の同義語の「訪ねる、訪れる」は下一段活用でその語自体の連体形語尾で<鶯>に繋がる、という語用の違いはある。でも、他に解釈の仕様がな所為もあってか、「訪へる」の意味は分かり易い。ところが、「花のねぐらに」の「に」だけは分かり難い。それも「ねぐらに木づたひて」と動作動詞が続くので、流し読めば動作方向の格助詞に見えて、「ねぐら」の方に向かって枝を伝って行くのかと勘違いする。しかし、それでは文意を損なうので、文意に沿うように方向の格助詞を考えると、「ねぐらの木から木(に)木伝ふ」という解釈は出来そうだ。が、それは意味と言うよりは動きの語調として感じるもので、オマケみたいなものだ。主意は困難強調の接続助詞の「に(～なのに、～だというのに)」であり、「ねぐら」の語に名詞<鳥の巣>と動詞<寝座す←寝暮らす>を復意させて、「花のねぐらに」を<折角住みやすい春の町暮らしなのに>と意味付けし、「谷の古巣」との対比を際立たせようとする語用なのだろう。母心だ。

声\*待ち出でたる(この声を待っていました)」なども(などと添句した歌や)、 \*「まちいづ」は<出て来るのを待つ。待ち受けて会う>と大辞泉にある。「たる」は動作完了状態の助動詞「たり」の連体終止で、状態の現在継続を示す。したがって、「声待ち出でたる」は<声を待っていて今は出てきている→待っていた声が聞こえている>となり、今聞こえている声は<この声>だ。

「\*咲ける岡辺に家しあれば」 \*注に<『源氏積』は「梅の花咲ける岡辺に家しあれば乏しくもあらず鶯の声」(古今六帖、鶯、四三五八)を指摘。>とある。必脚とは思いますが、この参照歌の背景は分からないので、明石御方としての歌意を考える。「家しあれば」は<住んでいるので>。「あり」がラ行変四段なので、已然形の「あれ」は已然を意味し、仮定にするなら未然形の「あら」に「ば」が付く。「乏し」は「ともし」で<少ない、不足する>ことから<珍しい、恋しい、うらやましい>とある。歌筋は<梅の花が咲く岡辺に住んでいるので鶯の声が聞こえなくて寂しいということは無い>だろうが、歌意を得るには「岡辺」と「鶯の声」が何を意味するのかが分からないと、この歌は意外性も無い説明文でしかない。で、御方が想定する「岡辺」は明石の<岡辺の家>であり、「鶯の声」は<姫の声>に違いない。しかし、御方はこの京都六条院冬の町に住んでいるのであり、実は「梅の花咲ける岡辺に家しあれば」は夢に過ぎない。だから、実は「乏しくもあらず鶯の声」は願望に過ぎないのであり、御方がこの古歌を引く気持ちは「この歌のように、梅の花が咲く明石の岡辺の家に居たなら何時でも娘の声が聞けたらうに」で、もしずっと明石で姫を手元で育てていたら、という遣る瀬無い思いなのだろう。

など(などという古歌に)、ひき返し(親心を繰り返して)慰めたる筋など書きませつつあるを(懐かしがった一節などを書き混ぜてあるのを)、取りて見たまひつつほほ笑みたまへる(殿が手にとってご覧になっては微笑みなさるので)、恥づかしげなり(御方は気が引けるようです)。

筆さし濡らして書きすさみたまふほどに(殿が筆先を墨で濡らしてその御方の流し書きに書き足しなさっている時に)、ぬざり出でて(御方が膝を進め出てきて)、さすがにみづからのもてなしは(そのように書き記した自分の母心の吐露は)、かしこまりおきて(慎み控えた物腰で)、\*めやすき\*用意なるを(おとなしく立場をわきまえているのを)、「なほ、人よりはことなり(やはり

格別な人柄だ)」と思す(と殿はお思いになります)。 \*「目安し」は<目障りでない>とあり外形上の<おとなしき>を示しているのだろうが、「畏まり置く」見識から<身分や立場をわきまえた慎ましき>と此処では解せる。明石御方は建前上は母の立場を慎まねばならない。 \*「ようい」は<心よい、気構え、心がけ>とあり、「なる」と連体してあるので、その<立場の分別>が見て取れる<控えた姿勢>「を」殿が見て、という構文。

\*白きに、\*けざやかなる髪のかかりの(白い小桂にくっきりと映える黒髪のかかり具合が)、すこしはらかなるほどに薄らぎにけるも(少しさらさらと細ったようなもの)、\*いとどなまめかしき添ひて(いっそう優美さが加わって)、\*なつかしければ(欲情をそそられたので)、「新しき年の\*御騒がれもや(新年早々の御心乱しにも、成るかも知れない)」と、つつましかれど(上への気兼ねもあったが)、こなたに泊りたまひぬ(殿は此方にお泊りになりました)。「なほ、おぼえことなりかし(やはり冬の町の御方は殿の覚えが格別らしい)」と、方々に\*心おきて思す(他の御方たちに於いては印象深くお思いになります)。 \*注に<白の小桂の上への意。>とある。玉鬘巻の「歳末の衣配り」では「梅の折枝、蝶、鳥、飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に、濃きがつややかなる重ねて(濃い紫の光沢のある内着を加えて)、明石の御方に。」とあった。 \*「けざやか」は<くっきりとしている、明瞭だ>。 \*「いとどなまめかし」は読み流すには惜しい描写なので、少し味わいたい。この「いとど」は「正身」の<生々しい存在>を受けていて、「なまめかし」の語に<女の生々しき>を込めている、とは我ながら抉じ付けがましいが、此処までの描写で光君が明石君に日陰者にして相済まないと言う自責と憐憫の情を募らせていることは間違いなく、その負い目に何とか報いたい対象の果敢無げな姿が「いとど」思いを募らせた、という筋は当然に語られている。で、その上に光君の年増好きというか熟女性癖が語られている所が、この言い回しの味わいなのだろう。やつれ姿に苦勞を偲ぶというのは分かり易い味わいだが、それだけにその筋は常套句で、それだけなら有り触れた話だ。みどりの黒髪の澁刺さより、弱弱しく細った髪に、苦勞とか年輪とかいう深みではなく、社会構造の絡みの中で綾として存在している多様性を感じて無性に欲情する、という男の性が語られているからこそ、この話は面白い。とはいえ、光君は闇雲に年増好きな訳では無い。末摘や花散里には欲情しないし、若い時のお手つき女房や召人に同世代や年下が多数居たらしい設定だ。しかし、趣を持って述懐されるのは藤壺と六条御息所である。夕顔の特異性は早世と藤原殿絡みからもたらされているが、夕顔を求めた光君の深層心理背景に藤壺の存在が在った節は濃厚だし、格式を守る王家の呪いが光君の価値観では甘美な御息所の性戯に固着しているかのような亡霊の出現だ。また、紫君に対する幼児性癖は藤壺の身代わり人形だったことが明示されている。そういう事情が在れば幼児性癖も許される、などということはないし、藤壺との不義自体が天帝への背信であり、個別の事案は多くの要因によってその可否は量られるだろうが、一般に社会的に力のある者は多くの許容範囲が認められる。何れにせよ、男の「欲情」という要素抜きにこの物語は成立しない。此処で言う「なまめかし」とは、そういう<優美さ>だ。 \*「なつかし」は<馴れ付く方向に進む→馴れ馴れしくしたい→肌を重ねたい→欲情をそそられる>。 \*「おんさわがれ」は紫君の<御心騒ぎ>を指す。「騒がれ」は「騒ぐ」の未然形「騒が」に、自然発生ないし受身を表す助動詞「る」が付いて、「れ」の連用中止で名詞化させた語なので、<噂が自然に立つ>と<噂し立てられる>と受身形の尊敬語<心を乱しなされる>の三通りの意味を取り得るが、「御」と表敬された「御騒がれ」は<御心乱し>だ。 \*「心置く」は<気に留める、用心する>。「おぼす」とあるので「かたがた」は他の夫人たち。

南の御殿には(本殿の東南の御邸では)、\*ましてめざましがる人びとあり(この元日の殿の末殿での外泊を、殊更に相応しくないものに思う女房たちの出迎えて、)。まだ曙のほどに渡りたまひぬ(まだ夜が白じむ内に殿がお帰りなされたのを、)。\*かうしもあるまじき夜深さぞかしと思ふに(まだお帰りには早すぎる夜深く暗い時刻なのにと思うと)、名残もただならず(明石御方は

未練が募って)、あはれに思ふ(殿のお泊りをあつけ無く思います)。\*「まして」は<それ以上に>という比較の副詞だから、「かたがた」の思いに<増して>という語調にも見えるが、「ひとびと」を「かたがた」と同列に比較するのは、身分社会の階級認識から外れる気がする。尤も、「かたがた」との比較自体を考えてみるなら、「ひとびと」が劣位だからこそ、「増して」敵意を顕わにする、という組織構造は理解できる。社会的存在のヒトの自己認識は必ず相対的だ。自分自身の身分がいくら低くても、所属組織の長が他組織の長より上位であれば、自組織の長の立場で他組織を見下して、どんな汚れた役回りにも自尊心が持てる、という心理構造だ。そして、それが組織の力の主要な要素だ。現場で殺し合いをして、ボス交で和解する、というのは政治の本質そのものでもある。現場の殺し合い自体は、昨今では映像音声の記録装置および媒体の電子化がボス交渉に於ける説得力を増したので、相当に抑制されるようにはなったが、障害勢力の物理的な抹消と言う本質は変わらない。しかし、此処の「めざまし」がその組織構造上の現場の<敵意>とは思えない。それは「南の御殿」にだけ在るのではなく、「夏の御殿」にも、この「冬の御殿」にも在るからだ。「めざまし」は、<末殿である冬の御殿>に対して<本殿の春の御殿>という「ひとびと」の<所属組織の優位性の自負>を示しているに違い無い。そして光君は「ひとびと」が「めざましがる」のを気にしたからではなく、その序列を自覚して早々に南殿に帰る。「あり」は殿の帰宅時の女房たちの描写かと思う。だから「まして」は、「かたがた」でさえ「おぼす」のだから「ひとびと」は<いうまでもなく>なのではなく、「みなみのおとど」だけに<殊更に>なのである。\*「かうしもあるまじきよぶかさ」は注に<明石御方の心中。>とある。「かう」は<「曙のほどに渡りたまふこと>、「しも」はそれが<必ずしも>、「あるまじき」は<妥当とは思えない>、「よぶかさ」は<夜深い暗さ>で、確かに分かり難い主語省略だが、文意を汲めば「南の御殿には」からの一連の文が、明石御方の視線で語られている気はする。

待ちとりたまへるはた(待ち受けていらした上にあつてはまたそれで)、\*なまけやけしと思すべかめる心のうち(きつと不満を燻ぶらせていらっしゃるに違いない心の内が)、量られたまひて(殿には思い遣られなさつて)、\*「なまけやけし」は今に通じる語ではないので語感がつかめない。「なま」は<何となく、どことなく>などと、明瞭な認識ではない生半可な中途半端なものだとしても何かはある、というような語感とも古語辞典に説明されているが、本来の語の重心は<生半可>という属性よりは<何かある>という存在の<生々しさ>なのだろう。だから、<何やら不明のものがある>という見方の場合もあれば、<何かが存在しているが未だ表面化していない→何かが燻ぶっている>という見方の場合もあり、此処では恐らく後者だろう。というのも、「けや」は<きわだっている、あざやかである>とあり、「けぎやか」に近い語感らしく、だとすれば「け」が注意喚起の接頭語に通じて<必ずや~に違いない>の語用を思わせるから、「けし(奇し・怪し・異し、怪しい・不当だ)」の「け」が更に強意されて、「なま」は<何やら>という<不確かさ>ではなく、<きつと(不満だろう)>という<存在>の強い予想を示している、と思うからだ。

「あやしきうたた寝をして(不覚にもうたた寝をして)、若々しかりけるいぎたなさを(年甲斐もなく寝過ぎしましたが)、さしもおどろかしたまはで(冬の御殿では、そのまま起こしても頂けなかったものですから、こんな時分の帰りになりました)」

と、\*御けしきとりたまふもをかしく見ゆ(上の御機嫌をお取りなさるのも可笑しげです)。ことなる御いらへもなければ(特には上のお返事も無いので)、わづらはしくて(殿は宥めようも無くて)、そら寝をしつつ(寝たふりをしながら)、日高く大殿籠もり起きたり(昼になってから寝室から起き出さなさいます)。\*「みけしき」は<紫君の御機嫌>。

## [第六段 六条院の正月二日の臨時客]

今日は(この正月二日の日は)、\*臨時客のことに紛らはしてぞ(私家としての祝賀会の招待客との挨拶があって忙しいからと)、\*面隠したまふ(殿は上にお会いなさいません)。 \*「りんじきやく」は大辞泉に<平安時代、年頭に摂政・関白・大臣家で大臣以下の貴族を招いて催した宴会。臨時の客。>とあり<大饗(だいきょう)のように公式の行事ではないところからいう>と説明されている。「大饗(たいきやう)」は<平安時代、宮中または大臣家で行われた恒例の饗宴。東宮・中宮の主催する二宮大饗と、大臣家が主催する大臣大饗とがある。また、大臣新任の際には臨時の大饗もあった。おおあえ。だいきょう。>と大辞林にある。「少女」巻第三章第三段に源氏大臣と藤原大臣のそれぞれの昇進祝いに大饗が開かれた、との記事があった。権力者との同席は私的だからこそ親しくなれる機会が期待できるのであり、公式な行事では催事進行に則って職務として列席するに過ぎない。 \*「おもがくす」は<照れ隠しをする、顔を隠す>とあるが、女が顔を隠すわけではないのだから、会うのを避けたのだろう。

上達部、親王たちなど、\*例の(習わし通り)、残りなく参りたまへり。御遊びありて(音楽会が開かれて)、引出物、禄など、二なし(記念品や御みやげ物など二つとない豪華さです)。 \*「れいの」は<例によって>だろうが、単に<いつものように>くらの語調とは違う気がする。尤も「いつものように」も含みが有る言い方なのだが、10年前の失脚時を思えば、光君個人に親しい者は乳母子の惟光や播磨守子や伊予介子などの数名だ。また、個人的な親密さを互いに共感できるのは誰でも少ないし、少ないから信用できる。つまり「残りなく参りたまへり」は権力者ゆえの賑わいなのであり、招く方も招かれる方もそれを承知で演じるのであり、だからこそ目出度い光景なのだ、という醒めた描写なのだろう。

\*そこら集ひたまへるが(そうした高貴な方々が所狭しと数多く集って御出でで)、我も劣らじともてなしたまへるなかにも(誰もが自分も他の者に引けを取るものではないと自負なさっている中にも)、すこしなずらひなるだにも見えたまはぬものかな(少しでも殿に準えられるほどの方さえいらっしやらないのですからねえ)。 \*「そこら」は<数多く>と古語辞典にあるが、「其処等」は<そうした身分の人々>を意味しているようにも思うし、今に通じる語感としては<其処等中に所狭しと>くらの感じだろうか。

\*とり放ちては(個別に見れば)、いと\*有職多くものしたまふころなれど(各人はとても祝賀の作法などには長じて立派に振舞いなさるものの)、御前にては気圧されたまふも(殿の御前になると気圧されて緊張のあまり動きが小さく堅くなってしまいなさるのも)、\*悪しかし(すこし見ても無いでしょうか)。 \*「とりはなつ」は<引き離す、別々にする>とあり、ひとりひとりを<別々にして見る>ということらしい。 \*「いうそく」は<学識>、特に<典礼に於ける事物様式などの式次第の決まり事>を言う場合もあるらしい。 \*「悪し」は「あし」ではなく「わるし」との読みになっている。「わるし」は「わろし」に同じとある。「わろし」は、同じ悪いながらも「あし」よりは<まし>らしい。平安時代の評価は「よし」「よろし」「わろし」「あし」の順だった、と古語辞典にある。

何の数ならぬ\*下部どもなどだに(取るに足らない付き人でさえ)、この院に参る日は(この宴席に供する日は)、\*心づかひことなりけり(身だしなみに気を付けて衣服を新調していました)。ま

して若やかなる上達部などは(まして若々しく着飾った主客などは)、\*思ふ心などものしたまひて(噂の姫君への関心をお寄せなさって)、すずろに\*心懸想したまひつつ(そわそわと自分の見映えを気になさっては)、常の年よりもことなり(例年にない賑わいです)。 \*「しもべ」は<雑役に使われる召使い>とある。下級の役人かとも考えたが、下級役人は招待されない私会だろうから、此処では招待客の従者と取る。 \*「こころづかひ」は<配慮>とあるが、与謝野訳文に従って<服装の身だしなみに気を付ける>と取る。また、「ことなり」と具体表現を避ける言い回しは、実体を知る者にとってはさぞ臨場感に浸らせる語りなのだろうと推測はされるが、実体を知らない私のような者にとっては臨場感以前に、例え遠景でも少しでも意味を掴まないとおハナシにならない。 \*「おもふこころ」は注に<玉鬢に対する関心である。>とある。 \*「こころげさう」は<恋しい相手に自分を良く見せようと言動に気を付けること>とある。

花の香誘ふ夕風、のどやかにうち吹きたるに、御前の梅\*やうやうひもときて、\*あれは誰れ時なるに、\*物の調べどもおもしろく、「\*この殿」うち出でたる拍子、いとほなやかなり。大臣も時々声うち添へたまへる「さき草」の末つ方、いとなつかしくめでたく聞こゆ。 \*「やうやうひもとく」は<次第に綻ぶ→次々に芽吹いて香り立つ>。 \*「あれはたれどき」は「誰そ彼れ時」を態と崩して、打ち解けた場面を演出した言い方、なのだろう。 \*「もののしらべ」は<演奏が醸し出す風情>。 \*「この殿」は催馬楽の曲名と注にあり、歌詞も次のように掲載されている。「この殿は もべも むべも富みけり 三枝の あはれ 三枝のはれ 三つ葉 四つ葉の中に 殿造りせりや 殿造りせりや」(催馬楽、此殿)。「今様ラブソディ」サイトの訳文で、この歌詞が<主人の繁栄を祝う歌>らしいことは窺えた。また、「三枝」は「さきくさの」という読みで「三つ」を導く枕詞のようだが、如何せん「さきくさ」が何の植物を指すのかは不明という、古語辞典の説明の覚束無さだ。で、和紙を作るときのコウゾに並ぶミツマタあたりかと思当すれば、ミツマタは江戸時代に輸入されたらしく、むしろ奈良率川(いさがわ)神社の「三枝祭(さいくさのまつり、ゆりまつり)」で使うユリの花の方が由緒が在りそうだが、何れにしても「三枝」の意味は掴みきれない。なので、下文の<「さき草」の末つ方(すゑつかた、後ろの文句)=「三つ葉 四つ葉の中に 殿造りせりや」>は<殿舎の数が増えて行く隆盛を言祝ぐ囃子言葉の語調>、としてしか理解できない。「打ちいづ」は<太鼓を打ち出して演奏を始める>。「ひゃうし」は<太鼓の打ち方、演奏の調子>だろうが<その様子>でもありそうだ。

\*何ごとも(どんな事でも)、さしいらへしたまふ御光にはやされて(殿がお言葉を添え為さる晴れがましさに引き立てられて)、色をも音をも増すけぢめ(その場の華やぎでも演奏の賑わいでも増す違いが)、ことになむ分かれける(はっきりと分かるのでした)。 \*こうした王朝風的美辞麗句は、今どきは北朝鮮の軍事独裁放送を彷彿とさせて、圧政と貧困に抛る滑稽さや悲惨さを思わせたりもするが、この時代の農業増産による国力増大を考えれば、この場面は実のある華やぎだったと思いたい。